

## 『ラシード全著作目録』について

本 田 實 信

ラシード・ウッディーン Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh b. 'Imād al-Daula Abī'l-Khair al-Hamadānī (1247頃-1318) のフラグ・ウルスの宰相としての多方面にわたる活躍、『集史』 *Jāmi' al-Tawārikh* を始めとする旺盛な著作活動について、われわれの知見は今や博く、深くなりつつある。新史料の発掘と刊行がなされるとともに、『集史』の原文校訂と翻訳も続けられている。近年のラシード研究がいかに多大の成果を挙げてきているかは1935年刊の C.A. Storey の『ペルシア文献志』 *Persian literature: A bio-bibliographical Survey* のラシードの項 (No. 106) と、1972年刊の Ю. Э. Брегель によるそのロシア語訳 *Персидская литература Био-библиографический обзор* の当該の項 (No. 240) とを比較すれば、一目して明らかである。頁数を見ても前者は8頁であるのに、後者は20頁に及んでいて、ブレーゲルによる増補・改訂量の多いのに驚かされる。ストーリーの原文のロシア語訳と、ブレーゲルによる増補との区別は、増補部分が〈 〉によって括られているので明瞭である。

ブレーゲルの増補・改訂のうち、特に私の注意を惹いたのは、『集史』の完成年代とその巻数についての部分である。ストーリーの本文 (p. 72) では

『集史』…A.H. 710/1310-11に完成…本来3巻に別けられていた…

とあるが、この部分をブレーゲル (стр.305) は次のように改めている。

『集史』…〈初版は706/1306-07年までに (その後710/1310年までに『五族譜』 *Shu'ab-i Panjāna* が書かれ、さらにその後ウルジェイト史が書かれた)〉完成…本来〈すなわち706/1306-07年までは〉3巻に、〈その後4巻〉に別けられていた…

ブレーゲルは、『集史』は3巻本であり、ヘジラ暦710年に完成された、という普通に言われている説を斥けたのである。もっともこれはブレーゲルの創見ではなく、A.Z.V. Togan (1890-1970), A. M. Мугинов, K. Jahn の主張を採用したものである。

しかしトガン、ムギノフ、ヤーンの三人も3巻本ないし4巻本の『集史』の実物写本

を発見したわけではなく、ラシード自身のペンになる著作目録の検討によって、『集史』の完成年代と巻数とを推理しているのである。またトガンはイスタンブールのトプカピ・サライ博物館において『五族譜』というペルシア語写本（No. 2932）を発見し、この『五族譜』こそ『集史』第3巻そのものであると考えた。

それではラシードの著作目録とはどんなものか。それは現在少なくとも三つ知られており、その三つにおいて目録内容はほぼ同じである。

第1のものは、ラシードのアラビア語版の神学作品集『ラシード全集』*al-Majmū'a al-Rashīdiyya*に含まれている『ラシード全著作目録』*Fihrist Kitāb Jāmi' al-Taṣānīf al-Rashīdī*である。この『ラシード全著作目録』は、E. Quatremèreの*Histoire des Mongols de la Perse*（Paris 1836）の序章 *Mémoire sur la vie et les ouvrages de Raschid-Eldin*の付録としてアラビア語全文が収録されている。カトルメールは *Bibliothèque du roi*（現 *Bibliothèque Nationale*）所蔵の、A.H. 710/1310-11の書写年代をもつ写本に拠っており、E.G. Browneを始めとする多くのイラニストは、このカトルメールの『ラシード全著作目録』を利用してきた。

第2のものは、レニングラードの東洋学研究所に所蔵されているペルシア語版 *Jāmi' al-Taṣānīf-i Rashīdī*（No. C 375）中の『スルタン対話』*Mabāḥith al-Sulṭāniyya* 付載の『ラシード全著作目録』である。A. M. Мугиновはこの写本を調査して、このペルシア語版の『ラシード全著作目録』はアラビア語版より前に作られており、A.H. 706/1306-7までには書かれていたとする（*Персидская уникальная рукопись Рашид ал-дин, Учение Записки Института Востоковедения*. стр. 352-375）。

第3のものも、ラシードのペルシア語著作『真理の精妙』*Latā'if al-Ḥaqā'iq*に付載されている著作目録である。この『真理の精妙』の14世紀後半期書写と考えられる写本がイスタンブールの *Aya Sofiya* の図書館（No. 3833）に所蔵されており、ラシード著作目録の一部のファクシミール版が、この写本を調査した K. Jahn の論文に載っている（“The still missing works of Rashīd al-Dīn”, *CAJ*, 9, 1964, pp. 115-117）。

ムギノフは、ラシードが自分の著作目録を執筆したのは、A.H. 706年であり、この著作目録に4巻本のラシードが載せられているので、『集史』も A.D. 706年までに既に出上っていたとする。さらにヤーンは4巻本『集史』が完成したのは、A.H. 705/6年以降 A.H. 710年以前であり、初版本とも言うべき3巻本『集史』は A.H. 705/6年以前に書かれたものであり、通説の A.H. 710年は『集史』精良写本がタブリーズのモスク図書館に収納された年であるとする。

『ラシード全著作目録』について (本田)

上述の第2, 第3のペルシア語版『ラシード全著作目録』を手許で精査する便宜を持たないので、ムギノフ、ヤーンの説に根本的に批判を加えることはできないが『著作目録』と実際の著作とは区別して考えねばならない。

次にトガンの発見した『五族譜』*Shu'ab-i Panjāna* もまことに興味深い史料であり (A. Zeki Veldi Togan, "The composition of the history of the Mongols by Rashīd al-Dīn", *CAJ*, 7, 1962. pp. 68-71; "Reşid-üd-Dīn Ṭabīb," *İslām Ansiklopedisi*, 9, 1964, p. 710; *Umumî türk tarihine giriş*, 1946, p. 258; *Tarihde usul*, 1950, p. 211, No. 117), その一部の写真が小林高四郎先生によって我が国にもたらされている (遠峰四郎「小林学士将来東洋学書目録」『東洋学報』32-1, 1948, p.114)。この『五族譜』が『集史』の第3巻を構成するというトガン説にも、今俄かに與し難い。確証がないのである。現行の『集史』序文中の『集史目次』では第1巻が『モンゴル史』, 第2巻『世界諸民族史』, 第3巻が『地理志』となっていて、『系譜』の巻は含まれていない現状では、前述のプレーゲルの増補・改訂にはなお疑問があるとする所以である。

このような研究状況においては(一)ラシードの全著作の検討, (二)善写本による『集史』全文の校訂, (三)ラシード伝記資料の収集といった基本的作業を地道に積み重ねてゆく他ない。さらに四シャー・ロフ治下のヘラートで修史事業に従事したḤafiz-i Abrū (1430年没)の編纂物を検討すれば, (i)現存『集史』写本の系統, (ii)現在なお発見されていない『集史』第3巻地理志の内容, (iii)『集史』と『五族譜』の関係, 及び『五族譜』と『高貴系譜』*Mu'izz al-Ansāb*との関係, などについて見通しが得られるものと考えている。

なお、現行『集史』の『集史目次』に明記されている第3巻『地理志』は現在に至るも発見されていない。或は書かれなかったのかもしれない。そうであるとすれば、『集史』第3巻にふさわしい『地理志』を書き足すことは、われわれ後学に課せられている任務であろう。